

## 高野山大学の使命

学 長 松長 潤慶



弘法大師空海は、平安時代初期の弘仁7年（816）に高野山を修禪の道場として開くことを朝廷に上表し、高野山の造営に着手した。

真言密教の学びの場である高野の地で弘法大師空海の教えを伝承してきた高野山大学は、前身である古義大学林が設立された明治19年（1886）5月1日を

開校日とし、2026年に創立140周年を迎える。

密教寺院において本堂の両側に祀られる曼荼羅には、大悲胎藏生曼荼羅で約400尊、金剛界九会曼荼羅で約1400尊の仏・菩薩が描かれる。これらの曼荼羅の中央に位置する大日如来は、宇宙の森羅万象をつかさどる仏であり、その属性を周囲の仏・菩薩に配当し、衆生のあらゆる悩みに常に寄り添っている。

曼荼羅の教理に基づく密教の大切な教えの1つに、「存在するすべてに価値を認める」という立場がある。弘法大師空海は、「すべての存在は仏である」との立場を示し、あらゆる存在から学ぶべきことを重視している。この世に存在するもので、何一つ無駄なものはなく、我々がそれぞれの存在の価値を見抜く目を育てることが大切であるという教えである。

弘法大師空海の代表的な著作である『即身成仏義』の二頌八句に「重重帝網名即身」という言葉がある。これは、帝釈天の宮殿にかかる網の継ぎ目にある複数の宝珠が、周囲360度に存在するすべての存在を映しこみ、それぞれの宝珠は周囲を映しこんだ状態を存在の本質とする。我々人間の存在の本質も同様で、我々は周囲との「関係性」により支えられており、目に見

えるもの、目に見えないものを含むあらゆる存在との「関係性」を保つことにより「生かされたいのち」を持つ生き物である。したがって、人間は自身を取り巻き存在する大自然や様々な生き物から様々な事を学ばなければならない。

高野山大学は、東京大学先端科学研究センターとの学術連携協定を結び、現代の最先端テクノロジーが範とすべき1200年前の叡智、つまり空海の哲学を通じて「いのちのあり様」に関する議論を重ねている。

18世紀から19世紀に欧米を中心に始まった産業革命以降、様々な科学技術が駆使され、現代社会で暮らす我々の利便性は急激に向上した。科学技術の世界では「分離・比較」による検証を手掛かりにあらゆるものに優劣をつけ技術発展を果たしてきた。その延長線上で、本来「分離・比較」して優劣をつけることの出来ない存在に対しても科学は触肢を伸ばしてきた。現代社会における「科学至上主義」ともいうべきあらゆるものに根拠を求める考え方に我々は日々翻弄されている。そのような中で、我々が今後取り組むべき課題は、視覚のみでは捉えられない「心の豊かさ」や「人としてのあり様」など、人間として「いかに生きるか」、つまり我々の「いのち」の意味を追求することである。

1200年の伝統をもつ精神性の高い高野山という場に身を置き、様々な経験を通じ、人間本来の生き方を模索することは極めて有益である。豊かな自然に囲まれた世界遺産の地にある高野山大学は、周囲に存在するものすべてが学びの対象であり、五感を通じて得られる刺激に身を投じて学びを進めていただきたい。